

チベツト放浪

藤原新也

チベット放浪

藤原新也

ふじわら・しんや

1944年3月4日福岡生まれ。東京芸術大学
油画科を中退。69年以来、7度にわたりイ
ンドを旅し、75年にはチベットにはいった。
『アサヒグラフ』連載の「天寿国遍行」で19
76年度日本写真協会新人賞受賞。著書『イ
ンド放浪』（72年朝日新聞社）。現住所埼玉
県草加市新栄町1000

西藏放浪

発行日 1977年8月10日 第1刷

著者 藤原新也

発行者 角田秀雄

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 東京・大阪・北九州・名古屋 朝日新聞社

定価 1200円

©1977 S. Fujiwara 0026-254488-0042

目

次

第一部 潮干の山越えて

第一章 笑っちまったしゃれこうべ觸體

第二章 妙音鳥カラピンカ

第三章 天に優しき地獄

第四章 遠くの彩いろどり

第五章 僧

第六章 僕から生まれた山犬が、山の向こうで哭いたな

7

27

45

75

99

125

第二部 ごくらく道

太古のへ血つちぐれが残した土塊

143

数珠じゆずを爪繰つまぐるペマ・タギー

152

オム・マ・ニ・ベ・メ・フーム

170

ヤルシヤンボイハリ
上方神降下の神嶺

199

その道……

239

あとがき

カラー口絵 ヒマラヤ西稜を越えたラダック地区で

写真・装幀 著者

第一部 潮干の山越えて

第一章 笑っちまったしやれこうへた髑髏



虫なのに、人間のような名前をして、沼地に棲んでいる、源五郎という虫……ユーモラスな名前とはうらはらに、鋭い牙を持ち、肉食である。魚や虫や貝、その他もろもろの生き物、時にはそれらの死屍を食べて生きている。この虫の特異性は、池沼に潜って生肉や死屍などを喰らっているくせに、その背甲の下に羽をかくし持って、時に空中を飛翔することにある。それも昼中でなく夜中に飛ぶ。

沼に潜って生肉や死屍を食するなどとは下劣な虫に違いない。そんな虫がなぜ空中を飛ぶ術を心得ているのだろうかと思う。しかし、地球の過去を思うに、下劣な、卑しい生き物ほど飛翔願望という病の虜になって、おしまいには病が本性になり、本当に空を飛んだりしている。遠い過去にあっては、地べたに這いつくばって鳥の卵などを盗み食いしていた爬虫類の類、つまり蛇や蜥蜴のようなもの、鳥に進化して空中を飛び回っている……近い話では、八万四千余もの卑しい煩惱群をかかえているという人類が、めでたく団体で空を飛んでいる。かの源五郎も、この種の、悪業即飛翔病の類型の中に組み込むことができるような気がする。

しかし、この虫は、なぜ夜にしか飛ばないのだろうかと思う。手前勝手に考えるに……この虫はひよっとすると夢を見ているのではないか、と思う。日常は沼に潜って、生肉や屍などを喰らっているがゆえに、夜になるとその忌むべき所業にさいなまれ、反動として、妙に柄に合わぬ高貴な夢を見たがるのではなからうか。人間にも夢遊歩行というのがあるように、この虫にも夢遊飛翔とい

うのがあるのではないか、と思う。

僕はこの虫のことをあまり好ましいとは思っていないのだが、この源五郎という虫の生態のことを考えていると、ふと、魔がさすように思い当たることがある。この源五郎……どこことなく、僕に似ているように思えるのである。この虫の生活とその行動、どこことなく、印度における僕の所業に類似するところのものがあるのだ。

僕がかねてより、自分のことを虫のようなものだ、と思っていた。印度大地を這うように旅しながら、そう思うのである。しかし、ヒマラヤ連山が、蓮の花の千の花弁だと知り、印度大地が泥沼だと知った時、おのずと、わが無名虫の生存圏とその環境などが知れてき……もはや、菜の花畑を舞う蝶などとは縁遠い身の上であることも知れてきた。……それではと、沼の面にあつて、泥に汚れることなく、比較的達者な泳法で泳いでいるあの水黽という虫ならば、と、ひそかに意中のムシを心あたためていたのだが、僕自身の所業を顧みるに、僕は泥沼印度でかなりの長きに渡って、ヒトの死屍に執着しており、それを写真におさめ、それを売り食いついた身の上……いわば、死屍を喰らって生きてきたのであった。ところが、あの水黽という虫、ものの死屍よりももっぱら交尾の方に執着している様子であり、これとは似ていないし、似ていたくない。

そこで、沼地に棲息して死屍を食する虫となると、数種の虫が浮かび上がってきたのだが、中でも、源五郎という虫は、その名が僕自身の人格を貶しめないような、何か伝統的な趣きを持つてい

たので、僕はこの源五郎という虫に似ているのだなと思ひ込むようにした。とくに、僕はこの虫が、夜な夜な沼の面からふらりと舞い上がり、何のいわれもなく空中を徘徊するということに、心なしか共感を覚える。

鴉の群れは十万那由他

泥沼印度に、死屍行脚を続けながら、僕も時おり、夢のような……夢を見るのであった。

——〈夢〉。ガンジスの対岸を見ていた。彼岸は黒い色をしていた。此岸も真つ黒、彼岸も真つ黒。僕は此岸より、彼方の黒い岸に向かって、思いつ切り石を投げつけたのである。彼方の岸の一点に、黒いものが、粉のように散って舞い上がった。その黒い粉は氣流の渦にすくわれるように次々に連鎖して空に舞い上がった。空が真つ黒になった。此岸の上にまで舞って来たその黒い粉を見上げると、それは群れなす鴉だった。群れは数にして十万那由他（兆）を超えていた。群れはさらに舞い上がり、黒雲となり、それは大雨となって河に帰った。僕は彼岸を見た。彼方の岸には、五彩の色が水玉を落としながら咲き乱れていた。花は数にして十万那由他を超えていた。マンダラ

ーヴァ花、大マンダーラーヴァ花、マンジューシヤカ花、大マンジューシヤカ花、アプロカ花、アーカーシヤ花、アミタユス花、等々、此岸に生きる者の知らぬ花々が咲きに乱れ、それは此岸に向かつて甘美な芳香を微風のように送っていた――

* * *

このような夢のみならず、此岸から彼岸への飛翔願望というものは、わが身の上に、その影をおとしてまといつく小さな蜂はちのように、常に僕の旅行くところについてまわった。……そして、ヒマラヤ、それも、その裏方の西藏チベットの高みというものが、泥沼インド印度に對する彼岸、あるいは天寿国（極樂）として記憶されて行つた。泥沼に棲すむ源五郎は、その無明行のさなか、数々の天寿国にまつわる嘘うそや詩を聞いた。

人は言う。……蝶を見た、と。孤蝶は、五彩の翅粉を雪の上に散りばめながら、峻険の嶺を越えて行つた、と。

ある、語部かたては言う……雪豹ひょうを見た、と。早春、菓草の芽を食はむ、その優しい牙を見たのだ、と。また、ある者は言う……鳥の声を聞いた、と。深い溪谷にこだまする妙音カウピナ鳥の、そのいかなる音楽よりも尊い声音について……若空無我常樂我淨、と、それは鳴いた、と。

花を見た、と、ある者は言う……彼の高地を、久しくめぐり歩む者の衣に、マンダーラーヴァ花

の花の香は移り棲み、それは、つゆ消えることがない、と。白い蓮華の花弁のようにそそり立つ千の嶺が、これらすべてのものを加護しており、すべてのものは、その蓮華の内に世界を築いているのだ、と。

その、蓮の花にかこわれし、禪定の地に遠く……久しく印度娑婆世界の沼地に棲息する源五郎は、時おり、旅のさなか、そんな夢のような話を聞くにつけ、飛んでみたい、という意欲にかられる。しかし、蝶や蜂が蓮の花にとまったりするのは、それなりに見栄えがするものだが、泥だらけの源五郎が蓮華にとまっている図は、どうもみっともないような気がする。だからあの高みに行くには、この泥にまみれた衣を脱ぎ捨て、何か別の新しい衣も必要となろうと考える。しかし、マンダラーヴァの花の香が移り棲む、というような衣というのは、いったい、どのような衣なのか、僕には見当がつかない。

僕の衣には、死臭がしみついてるように思えた。ヒマラヤに遠く、ヒトの屍のはき出す紫煙にむせながら、走り回っていたのである。ハイエナのように瀕死の男のかたわらに写真箱をぶらさげてたたずみ、男の死ぬのを待っていたこともある。あるいはまた泥沼の中の源五郎が屍を喰らうように、屍のあるところ、何がしかの実入りがあるうと、河面に流れるむくろを追って舟を漕いだこともあった。

石の上にも三年面壁九年、と言う……なきがらのかたわらにも八年とでも言うべきか。僕は印度

泥沼世界で、ヒトの屍を見続けて早や八年になろうとしている、しかし、ちっとも光明がささない。石の上にも三年とは、石の上にも三年坐っていれば、石も暖まる、安住の地が得られる、ということだと聞くが、僕は石の上よりも居心地の悪いヒトむくろの上にその二倍もの長い間坐り続けている。しかし一向に安住の地が得られない。かと言って、達磨だるまのように（まだこれには一年の猶予があるが）何か良いことを悟ったかというでもない……不毛の感が深い。

しかし、泥沼に、蝶を夢見る源五郎、とでも言うか、泥沼も棲めば都、ものの屍を喰らいながら、惰眠をむさぼり、ちよつと神様の夢など見たりして暮らしている方が、わが身の素姓に合っているのではないかとも思う。しかし、それでは、僕の御形みかたが、あまりに源五郎のそれに酷似し過ぎている。僕は、源五郎に親しみを持っているが、それが自分自身であることには耐えてゆけぬ。いつの日か、訣別せねば……と思う。

印度インドにおける、旅の終わりが近づいていた。

僕はある時、遠くに犬の声を聞いた。河の彼方に犬の声を聞いた。その犬どもの、咆哮ほうこうに耳をかたむけ、歩んだ時……そこに、長い旅の終わりと、新たな旅の始まりが見えた。

ヒマラヤを見ずに、相変わず、ガンジスを見ていた、ある冬の朝。その中流に、僕は犬の声を聞いたような気がした。

哭声なきは、河岸からでなく、それよりやや下流の水の面から聞こえて来るように思えたので、下